芸術学部　美術学科　教授

永田　郁 NAGATA　Kaoru

E-mail/mahabala@art.sojo-u.ac.jp

研究業績データベース

南インドの宗教美術の在り方を探る

～ヒンドゥー教世界における他宗教との「からまりあい」の諸相～

研究シーズ概要

南インドの宗教美術は紀元前のアマラーヴァティー大塔創建以来、その後4世紀までクリシュナー河中流域を中心に仏教美術が、7世紀パッラヴァ朝再興後は、タミル地方を中心にヒンドゥー教美術が台頭していきます。7世紀以降南インド一帯は、ヒンドゥー教が中心となります。ただしヒンドゥー時代以前に信仰されていた仏教やジャイナ教も、ヒンドゥー世界の中でなお共存し、特に仏教は、北インドより長く16世紀まで（北インドは13世紀）その信仰が存続しました。

本研究は、南インドというヒンドゥー教が大勢的な地盤で、他の宗教が存続し得た痕跡を、その時代の王朝の銘文資料や寺院、またそれに付随する神像（仏像も含め）などの考古学的資料から読み解き、ヒンドゥー世界において複数種の宗教や民族がどのようにからまりあって共存してきたか、南インドの宗教美術の造形活動の実態・構造を明らかにしていくものです。

利点・特長・成果

インドはヒンドゥー教世界ですが、古来より仏教、ジャイナ教、また中世以降はイスラーム、キリスト教など他の宗教がヒンドゥー世界とからまりながら共存してきた多神教（信仰）の世界です。本研究の目的は、南インドの紀元前後より8世紀までの宗教美術、特に仏教、ヒンドゥー教の造形活動を研究対象にどのような関係性をもって信仰を持続させてきたのかについて、各宗教の考古学的資料や銘文資料とともに読み解き、南インドにおける宗教美術の在り方、すなわち複数種の宗教の具体的な「からまり方」を通して考察していきます。特に、複数の信仰の考古学的・文献的痕跡から総合的に読み解くアプローチは、従来のインド宗教美術史ではあまりなかった視座であり、本研究の特長となります。これらのアプローチを取り入れることによって、環ベンガル湾的視座によって南アジア・東南アジアの宗教美術の特性を明らかにする成果が期待できます。

南インド・ヒンドゥー教寺院の実地調査の様子

南インド・アーンドラ・プラデーシュ州
ヒンドゥー教寺院の本尊シヴァ・リンガ

その他の研究シーズ

■南インド・床絵コーラム
■アジア化する仏教美術
■環ベンガル湾的世界と宗教美術（ヒンドゥー化、サンスクリット化）
■アートをみる：鑑賞教育・ワークショップ

キーワード　南インド、民間信仰、仏教美術、ヒンドゥー教、環ベンガル湾、海のシルクロード、文化遺産・国際協力
コーラム、アジア美術、鑑賞教育、ワークショップ

本技術に関し、対応可能な連携形態（サービス）

知財活用	否	技術相談	否	共同研究	可
施設機器の利用	可	研究者の派遣	否	技術シーズ 水平展開	否

開発段階

- 5　第5段階　製品・サービス化（試売／量販）段階
- 4　第4段階　ユーザー試用段階
- 3　第3段階　試作（実証レベル）段階
- 2　第2段階　試作（ラボ実験レベル）段階
- 1　第1段階　基礎研究・構想・設計段階

SDGsの目標

4 質の高い教育をみんなに

11 住み続けられるまちづくりを

17 パートナーシップで目標を達成しよう